

海圖室に行き擔當の船員に石門の位置(經度緯度)を知る爲め、海圖を見せ
て貰ふ。又、石門への交通の便を尋ねたが、も一つ不明であつた。然し、後刻
石門位置は $25^{\circ}17'.5N$, $121^{\circ}33'.5E$ であるとの報知を受けた。

參謀本部五萬分の一の地圖が手に入れば容易に判ることだが、無いので精密
なポジションが得られないのである。

船中の第一夜は次第に暮れて行く。同じ觀測行の方があつた。鹿兒島高等農
林學校物理學の藤瀬四郎教授と同校學生坂上務氏であつた。藤瀬教授は日蝕を
兼ねて臺灣の地質研究にお出でになるのである。それから、今治の回漕店主飯
義壽氏、大阪の絹織工場御經營の吉田長祥氏、宮崎縣延岡の渡木慶雄氏も同船
であることが判つた。皆、日蝕觀測のため渡臺されるのであつた。夜遅くまで
雑談に過ごす。波は高く船はローリングする。(つづく)

日蝕の友より

拜啓 先日は、わざわざ臺灣迄お出かけ下さいました節は、私共會員に色々
と御指導下され洵に有難く感謝致して居ります。

先生も御無事にお着の事と存じ陰ながら安心致して居ります。

待ちに待つた九月21日も、悪天候に禍ひされ、充分に觀測する事も出来ませ
ず、残念に思ひましたが、4度ばかり(ほんの瞬間ではありますが)コロナを
觀望出来、満足に思つて居ります。

一番心に残りましたのは、皆既に入る瞬間、先生のゴ1の御聲と共に起つた
息づまる様なシーンで、何かドスンとしたものを感じ、あとは、何が何やらボ
オートとして、今思ひ出しても、夢の様です。時々、ふと、あの中學生兩君が
読み上げて居ました時計のカウントの聲が耳に甦つて來ます。

當日、撮影致しました部分蝕とプロミネンスは、あの望遠鏡を使ひ、なれない
のか、不面目ながら、同封の部分蝕1枚しか出来ませんでした。御笑納下され
ば幸甚と存じます。使用器械は7センチ手動屈折赤道儀。乾板はオリエンタ
ル・プロセス、7種を口径1時に絞り、F25、 $\frac{1}{200}$ 秒で切り、フィルタはバイン
トシナ。印畫紙はフジの利根。撮影時は12時17分00秒。尙當日私が觀測隊の
方々を撮影致しました記念寫眞を贈呈致します。御笑納の程。

いよ々々火星も接近致しました。天氣を心配しながら待つて居ります。

地理的に恵まれた臺灣に居ります私共に、今後何かと御注文を下され、御指
導と御鞭撻を賜り度お願い致します。御期待には沿ひ得る事は出来ませんで
すが、一生懸命に致すつもりです。

昭和16年十月1日

和泉三思

會員よりのたより

田 上 訪 問 記

去る十月のある日滋賀縣栗太郡桐生に、山本先生を訪問する。

東海道線草津驛にて列車を捨て、先生の住所桐生までは相當の距離がある。草津川を遡ること約1里半といつたところで、向ひは近く、石山、南郷に通ずるといふ仙境。

目下先生は、天文臺の建設に没頭中、以下先生の御宅の素描である。

山本栗齋先生——先生のお庭に大きな石碑がつき立つてゐる。洵に美事な碑で庭全體の景をいやが上に添へる立派な碑である。

たどたどしい漢文の力で讀んでみると後より先生が

「これは私のおぢいさんでしてね。僕が三高に入つてゐる頃、たしか、二年頃までは居りまして、中々、やかましい爺さんでしたよ」とニコニコしながら語られる。

石碑の文字は中々色々なことが書いてある。先生の家は代々此の地方即ち田上村の醫を業とする家柄で、栗齋先生も醫者であつた。しかし、此のお爺さんはたゞのお醫者様でなかつた。縣會議員もおやりになれば、田上村村長を二十年もやるといつた政治家でもあつた。

「先生、お爺さんは中々の政治家でゐらつしやつた方ですね……………」

山本博士「中々のお爺さんで、犬養毅だとか、尾崎行雄だとかと、民權の主張者でもありましてね、非常に親しかつた様です。……………尙その上、俳人、歌人でもあつて……………」

なる程、尙ほ行を追ふとさうした方面に於ても、大家であり、多くの門下生を持ち、景敬的であつたことも書き連ねられてある。先生の座敷に通されると、額には、巖谷一六居士の文字、「山靜日長」とかいつてゐる。

博士「こゝにゐるとこの文字が實によく、あてはまるものです……………實際、山靜にして日長しですよ……………」

天文臺——それから先生が目下建設中の天文臺を案内して頂く。大きな古い土藏をぶちつらぬいて天文臺が出来上つてゐる。

博士「始めこの村の大工さんに地下から24尺煉瓦をつんでくれといつたら、一體何をなさるつもりですかといつた工合で、こんな仕事は始めてでもあるので、その内に僕と一緒に色々なことをやつてもらつてゐる内に、大分僕の意圖が分つて來てくれて、この頃はこの仕事に大いに興味を持つ様になつて來